

特別寄稿

変容する都市コミュニティの普遍

——都市社会学調査における「共在感覚」の発見

奥田 道大*

関西学院大学 21 世紀 COE プログラムは、2004 年 3 月 26 日、学士会館（東京）においてシンポジウム「人類の幸福と社会調査」を開催し、立教大学名誉教授の奥田道大氏に基調報告をしていただいた。本号特集「社会調査の社会学」の趣旨に関わるテーマであることに鑑み、基調報告原稿に加筆の上、ご寄稿いただいた（編集委員会）。

■要 旨

日本の大都市社会は、コミュニティ・レベルでは「同質集住・異質排除」の性格が濃いと指摘されている。筆者はこの指摘の誤りをコミュニティの新規定を通してただしてきたが、1988 年に“団塊”としてのアジア系ニューカマーズが大都市インナーシティに來住したのを新テーマとして、いわゆる池袋／新宿調査を開始した。この調査は 15 年間にわたって継続実施されたが、來住の動機を自らの生きかたの工夫と設計に求めた彼らは、一方ではその後に来來住のニュー・ニューカマーズと地元日本人との仲立ちの役割を果たすとともに、彼ら自身も母国を含め日本以外の国への再移動を視野としてきている。

ニューカマーズの子どもの成長を含めアイデンティティーズ問題その他、池袋／新宿の新実態は、やはりアジア系ニューカマーズを迎え入れた環太平洋圏の大都市インナーシティ相互のレファレンスを可視的にしている。そこでは、これまでの単一民族、国家を所与としたスタティック・コンパラティブから、トランスナショナルな人びとの生きかた、幸福感を相互レファレンスするダイナミック・コンパラティブの手法が開発されている。

キーワード：越境アジア系ニューカマーズ、「第 3 の空間」としてのインナーシティ、都市共在感覚、参画型行為調査、21 世紀の都市エスノグラフィ

*立教大学名誉教授

1 池袋／新宿の「越境」アジア系ニューカマーズ調査 (1988-2003) から学ぶこと

1.1 越境アジア系ニューカマーズの来日動機

筆者は2004年3月に関西学院大学 COE のシンポジウムで報告する機会を持ったが、同報告では筆者が所属した立教大学および中央大学（ともに東京）の学部、大学院学生を中心とした調査チームで手掛けてきた通称池袋／新宿調査がいわば一本の太い幹に当たる COE プロジェクトの四囲にひろがる一筋の枝葉の位置にある、と判断した [奥田, 2004 a]。池袋／新宿調査は社会調査史上ではささやかなケース・スタディの域をでないが、それでも越境アジア系ニューカマーズが団塊状に来日した1988年を、東京・池袋、次いで新宿既成中心市街地周辺にあつて面接調査開始の元年としたことは、都市社会学者としてのささやかな誇りである。

越境アジア系ニューカマーズの来日動機（例えば「自分のこれまでの人生を変えるキッカケとしたかった」他）と彼らの生き方の工夫や設計をキークエスチョンとした面接調査票によるインタビュー形式はその後15年にわたって継続されたが、1988年当時のデータは『池袋のアジア系外国人——社会学的実態報告』、『新宿のアジア系外国人——社会学的実態報告』として公表された [奥田・田嶋編, 1991, 1993]。公表当時は、「日本社会の同質集住・異質排除」「日本は世界のモデルになるのか」が、国内学会で未だとりざたされていた時期でもあり、例えば「池袋／新宿がニューヨークのハーレムのようにスラム、ゲットー化されるのは何時か」との質問に悩まされた。

右肩上りのバブル崩壊を目前とした時期に、東京の大都市将来設計を共通テーマとした国際シンポジウムが開かれて、筆者も一コメンテーターとして出席し、その際池袋／新宿調査の最新データを紹介した。折しも同席の『メルティング・ポットを超えて (*Beyond the Melting Pot*)』の著者グレイザー (Nathan Glazer) が、「日本や西ドイツのような硬い都市構造にあつて、外国人労働者受容の話は、納得しがたい」とコメントされたのを記憶している筆

者としては、グレイザーはニューヨークの移民モデルについてもアフリカ系、プエルト・リコ、ユダヤ、イタリア、アイルランドと、ヨーロッパ系に限定されていて、アジア系、ヒスパニック系等の新移民の動態については、見誤ったと判断している [Glazer & Moynihan, 1963; ハーヴァード G. S. D. 東京セミナー, 1989]。

1.2 「第3の空間」としての大都市インナーシティ

同じ東京大都市圏を対象としても、「都心」と「郊外」への二極分解の20世紀システムのもとでは、大都市中心市街地周辺のインナーシティは、「都心」と「郊外」のはざまに沈む灰色地域 (gray area) として特徴づけられる。筆者らの池袋／新宿調査では、「都心」と「郊外」の両翼を結ぶ第3の空間 (Thirdspace) の21世紀システムの東京大都市圏として位置づけ直した。「都心」「郊外」の各一部を含む「第3の空間」としての池袋、新宿の大都市インナーシティの地域現場では、越境アジア系ニューカマーズの生き方と生活設計の観点から、面接インタビュー調査を集中的に実施した。

1988年から15年を経過した現在では、「池袋生れ、池袋育ち」「新宿生れ、新宿育ち」の二世達が、中学校進学期をむかえて郊外移転か、母国へのUターンを含め国外への再移動を生活設計する段階にさしかかっている。同じアジア太平洋圏での越境大都市インナーシティの地域現場では、例えばアジア系ニューカマーズのパーソナル・ネットワーク生成、あるいはキャリア・デザインの相互のレファレンスが、可視的になり出した。筆者は相互のレファレンスを、トランスナショナルな相互レファレンス、あるいはダイナミック・コンパラティブの手法と名付けている。

1.3 都市コミュニティの新定義とは

2001年を境としてアメリカ社会学では、トランスマイグラントと彼らの子ども達の調査研究の蓄積を通して、例えばトランスナショナル・コミュニティ、「下からの」トランスナショナリズム／アーバニズム等の新コンセプト

ト化が図られている（例えば、Portes [1996], Korzeniewicz & Smith [1996], Levitt [2001], Smith & Guarnizo [1998], Bean & Stevens [2003]）。日本の都市社会学でも同様の傾向にあるが、筆者の都市コミュニティ規定では、まさにこのトランスナショナル・コミュニティの動態が背景にある。

さまざまな意味での異質・多様性を内包した都市的な場であって、人びとが共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして結び合う生成の居住世界 [奥田, 2004 b: iii]。

池袋／新宿の地域現場では、まさに錯綜体都市・グラスルーツ版の様相にあるが、かりに同じ近隣住区単位でもストリート一本を隔てて背景を異にする居住生活者が住み合う新実態のもとでは、例えばエスニック・コミュニティとか外国人居住者という表現自体が、馴じまなくなっている。地域内部の些少のコンフリクトを含め密度濃く住み合う新実態に、ゆるやかな絆＝ルース・コネクションズの本の補助線をひくとしたら、どのようなキーワードが当てられるか。筆者は2004年のCOEシンポジウムで「都市共在感覚」の用語を当てた。この用語はオリジナルには文化人類学者の用語の援用であるが、この用語の含意は、これまで筆者が使用してきた「都市共生の作法」よりも、地域現場の拡がりや賑らみある現実を率直に捉えている。

この「都市共在感覚」は、第1回池袋調査当時の越境ニューカマーズの住まう木質アパートの隣室のおばあさんの、「お隣りの福島県出身の若者が、福建出身の若者に代ったからといって彼を異邦人視するいわれはない」の言葉から、またストリートごしに聞こえる耳慣れない会話を通して「お向かいさんの存在をうっすらと感じる」から、本稿の後半で引用のアンダーソン (Elijah Anderson) の「ストリート・ワイズ (Street Wise) 感覚」、あるいは「ストリート上のコードとは (Code of the Street)」も、都市共在感覚の守備範囲にある。筆者らの調査も「参画型共同行為調査 (Participatory Action Research、略称 PAR)」を旨としながらも、これまでの面接調査法やダイアロ

ーグによる会話相互行為分析だけからでは、リアリティの捉え方に欠ける。

筆者らの調査の自己アセスメント項目、「先見性」「モデル性」「継続性」…、例えば継続性自体、系統性というよりも、つぎつぎと挿し木を新しい土壌に植え直す作業をくりかえすばかりである。第一、都市コミュニティの地域現場には、地元日本人と越境アジア系ニューカマーズをえり分けるデータ・ベースが、筆者らにはもはや用意されていない。

2 戦後日本の都市社会学調査上の位置

2.1 都市コミュニティ論、あるいはコミュニティとエスニシティ論の新しい階梯

越境のアジア系ニューカマーズを迎え入れたのは、「日本社会」あるいは日本社会のモデルとしての新中間層支配の大都市郊外地でもなければ、CBD (Central Business District) 支配の都心でもない。この郊外地と都心地のはざまに位置するのは、大都市インナーシティである。この大都市インナーシティは、都市社会学調査の古典段階では、郊外と都心のはざまに沈む灰色地域＝スラム・コミュニティ、ゲットーとして初期移民の滞留地の色彩が濃かった。大都市郊外と都心の二極分解の近代都市＝メトロポリス段階から、都心と郊外を結ぶ「第3の空間 (Thirdspace)」として再構築される脱近代都市＝ポストメトロポリス段階では、「下からの (from Below)」制度形成、思想化される周辺世界の *real-and-imagined place* が捉えられるようになった (例えば, Soja [1996])。筆者の都市コミュニティ規定も、既成郊外と都心の両ウイングと結ぶ第3の空間＝大都市インナーシティを磁場としている。なお筆者は、理論的には「第3の空間」としての大都市インナーシティを、コミュニティ生成と結ぶ「都市」「都市的であること (Being Urban)」のモデルと見立てている。

ポストメトロポリス段階の大都市インナーシティは、都市社会学調査上次の諸特徴を具現する。

(1) 世界の中の地域

大都市インナーシティは内に閉じた一国モデルではなく、越境の回路と結んだ移動する人びとや「文化、資本、エスニック・ネットワーク」の結節点としての位置にある。したがって、1970・80年代以降のアジア系ニューカマーズにとって、環太平洋圏での大都市インナーシティが共通の受け入れ基盤をなす。例えば、池袋のアジア系外国人にとって東京や大阪の大都市インナーシティは共通の受容基盤をなすが、日本の池袋や新宿は第2志望、第3志望であって、日本が志望第1順位であるわけではない。

(2) 発想としてのトランスナショナル・コミュニティ

一国システムをこえた越境のコミュニティは、トランスナショナル・コミュニティ、あるいは「下からの」トランスナショナリズム等と読みかえられている。越境のアジア系ニューカマーズは、例えば池袋や新宿の大都市インナーシティにあって、定住型を所与の居住パターンとするわけでない。同一コミュニティでの居住の累積過程が「定住型」とカテゴリー化されることはあっても、「定住型」と「流動型」との境い目は、曖昧である。何かの縁で居住のキッカケを得た地域は、自分にとって一国システムが何であれ、一所懸命の地域であるとは、越境中国人居住者の言辞である。また面接調査がキッカケで親交をもった台湾人家族は、新宿で知り合った越境ニューカマーズ相互の組み合わせである。新宿生れ、新宿育ちの2人の子どもは上の男の子が中学校進学期をむかえて、教育環境への配慮から郊外移転を考えたが適当な物件を入手できず、結局のところ台北郊外にUターンした。日本が見限られたとショックを受けた面接者の女子大学院生は、台北への再訪問調査を実施した。いわば越境ニューカマーズの移動に合わせて面接調査者も移動するというケースは興味をひくが、越境ニューカマーズは日本から台湾へのUターンというよりも、新宿から東京圏郊外地のもう一つ先に、台北新郊外地の物件を見出したとの生活感覚であった。そこには、トランスナショナル・コミュニティ感覚で新宿と台北郊外地、日本と台湾を架橋するダブル・アイデンティティーズが看取された。1987年に来日した父親は、日本をマーケ

ットとした旅行業を営んでいる。中学校進学期をむかえた男の子は、台北での日本語検定の最上位成績者であるが、高校ないし大学を日本（および米国）で学ぶことを生活目標としている。下の女の子はすでに新宿の絵画教室に通っていたが、美術家志望の夢を台北でふくらませている。

大の日本人びいきで教育熱心な母親は、台北で日本語の“お母さんしている”生活スタイルを実践した。“お母さんしている（日本語のママ）”とは、新宿の隣り近所から学んだことだが、日本人のお母さんは朝食の用意をして、子ども達に食べさせて学校に送り出す。この生活習慣を台北に輸出したということだ。台北ではお母さんが殆んど出勤するという事情もあるが、近所の店頭で饅頭や粥をかきこむ、というのが毎朝の風景である。

子どもの健康や生活規律にとって良好と判断した母親は、“お母さんしている”を継続した。いわば日本式の“お母さん”業を続ける一方で、母親は日本向け国際旅行ガイドの資格取得の受験勉強をはじめている。

“アジア・バロメーター”の国際比較調査プロジェクトを新規に開発した政治学者・猪口孝によると、「あなたは朝御飯を食べたか」の質問があるが、そこには国別の生活水準の豊かさ－貧しさが垣間見られる〔猪口，2003：18-23〕。しかし朝食一つとっても、越境移動者による日常化した生活習慣の刷新化、組み替えが工夫されていることを知る。「下からの（from Below）」アーバニズム＝都市的生活様式の工夫、設計ともいえよう。

「第3の空間」としての大都市インナーシティを磁場とするトランスナショナル・コミュニティ、あるいは「下からの」アーバニズム、トランスナショナルリズムの流れにあって、これまで都市調査上、都市政策上のソーシャル・フィールドをなしたローカル・エスニック・コミュニティの実態および学説について、批判検討しておきたい。

例えば「ボストンのイタリア人スラム」「ニューヨークの黒人ゲットー」その他のタイトルで知られる初期移民の滞留地＝スラム、ゲットーは、初期移民の民族・人種系列ごとに内に閉じたローカル・エスニック・コミュニティのカテゴリー化が図られていた。「大都市の中のムラ」「大都市のムラびと

(urban villagers)」と比喩表現されたローカル・エスニック・コミュニティは、第2次大戦後の大都市既成市街地再開発事業に当っては、上からのスラム・クリアランス型が政策モデルをなした。しかし後にも紹介する W. F. ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』が1930年代に初期イタリア系スラムとしてのカテゴリー化を、彼らの第2世代のストリート・コーナー・ボーイ達の拡がりや脹みある生活世界のディテールな社会学的分析を通じて批判検討したことは、ひろく知られている [Whyte, [1943] 1993 = 2000]¹⁾。ところで、第2次世界大戦後の上からのスラム・クリアランス型市街地再開発事業が、イタリア人コミュニティの抵抗にさらされるまで『ストリート・コーナー・ソサエティ』ですでに明らかにされた新しい事実発見面に気付かなかったことは、市街地再開発事業当局、都市社会学界にとっても、高坂健次のつとに紹介する missed opportunity の一つの例示といえよう。

「大都市の中のムラ」「都市のムラ人 (urban villagers)」と規定された大都市のローカル・エスニック・コミュニティの実態は、21世紀システムの大都市インナーシティのリアリティの捉え方と相俟って、再解釈が促されるようになる。特に1970年代以降のアジア系、ヒスパニック系の新移民を迎え入れるようになっては、20世紀システムの古典移民、ローカル・エスニック・コミュニティ把握とは一線が画されるようになる。筆者らの池袋／新宿のアジア系ニューカマーズ調査も、この新移民のカテゴリーに入れられる。20世紀システム大都市の衰退地区の再生、再活性化と繋げるローカル・エスニック・コミュニティの新実態把握と合わせて、古典移民と区別される越境新移民はアメリカ合衆国における最初のステップを同じ民族・人種系統の既存ローカル・エスニック・コミュニティからスタートするわけではなく、むしろ諸個人や家族の所得水準や都市的生活様式の条件に応じて、任意の居住コミュニティ選択がはじまる。例えば、中国系(台湾系)新移民のニューヨークでの実態を調査した Chen, Hsiang-Shui は『もはやチャイナタウンの時代ではない (Chinatown No More)』の一書にまとめている [Chen, 1992]。タイトルからもうかがえるように、中産階級中国系(台湾系)越境新移民

は、ニューヨーク既成中心市街地のオールド・チャイナタウンを迂回して、最初の生活ステップを彼らの所得水準や都市的生活様式の条件に応じてニューヨーク郊外の居住コミュニティに求める。ニューヨーク郊外といっても、実際には既成中心市街地周辺のいわゆるインナー・サバークに基調があるが、人種・民族的に、階層的に mixed した「郊外居住地」であることに変わりない。この「郊外居住地」は、中国系（台湾系）を中心としながらも、ストリート1本を隔てて例えば韓国系、ベトナム系、そしてヒスパニック系の近隣住区と背中合わせの状態にある。逆にいえば、近隣住区相互は1本のストリートを回路として相互に滲み合う関係にある。

ニューヨークの「もはやチャイナタウンの時代ではない」では、中産階級中国系（台湾系）をメジャーとしながらも、近隣住区ごとに民族、階層性に差異性のある郊外居住者相互が政治的結社、信仰集団、祭祀・親睦集団その他、多様でボランタリーな中間集団、結社が民族間をブリッジする役割を果たしていることが判明している。ほんの一例として、*Chinese-Korean Relations in Flushing* というネーミングの結社もある。興味あることは、『もはやチャイナタウンの時代ではない』の報告書の半分近くの頁が多種多様なテーマにわたる中間集団、結社の事例紹介と分析にふさがれている。西海岸のロサンゼルス郊外では、アジア系、ヒスパニック系、そしてアフリカ系中産階級住民をメジャーとする郊外地コミュニティの誕生が『第一の郊外チャイナタウン (*The First Suburban Chinatown*)』のタイトルの社会学専門書で報告されている [Fong, 1994]。この郊外チャイナタウンの風景は、郊外型生活様式 (*suburban way of life*) に関するかぎり、1960年代当時の中産階級白人を中心とした大都市郊外のサバービア風景と相似している。特にここで注意したいのは、この『第一の郊外チャイナタウン』のタイトルは、歴史社会学者ビンフォード (Binford, Henry C.) の名著『第一の郊外 (*The First Suburbs*)』をもじっていることである [Binford, 1985]。同書はボストン郊外のケンブリッジを調査対象としているが、ホワイト、アングロサクソン系民族、プロテスタント、略称して WASP を排他的にシンボル空間とした新郊外地の誕

生を歴史社会的に証明した書である。しかし「第一の郊外」のタイトル自体、すでに30年後の「第一の郊外チャイナタウン」の誕生を暗喩していたともいえよう。

ところで、現実としての大都市インナー・サバークの郊外チャイナタウン、コリアン・タウン他の新実態に対して、中心市街地界隈の伝統型チャイナタウン、コリアン・タウン他は、今後どのような方途を辿るのか。内に閉じた「ローカル・エスニック・コミュニティ」「都市の中のムラ」の位置づけはともかくとして、21世紀システムの大都市にあっては、衰退化の傾向を免れ得ない。ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア他の伝統型チャイナタウンは、むしろエスニック・ビジネスや特異な景観を売りとしたシンボル・コミュニティに存在証明が見られる。しかし、伝統型小宇宙としてのローカル・エスニック・タウンを現代的に仮構したモデルとしては、比喩的には大都市中心市街地の旧エスニック・タウン跡地に誕生する仮称「エスニック・ミュージアム」を訪問するより他ない。

エスニック・ミュージアムは、立地する大都市への民族・人種別初期移民の流入と生活・労働事情、およびエスニック・コミュニティの風景と居住状況が、膨大な聞き書きメモ、日記、手紙、写真その他の資料ドキュメントとともに、各種映像メディア、催しもの、展示もの、他の事業を駆使して開館している。

このように「大都市のローカル・エスニック・コミュニティの存在性は、先ずは地元のエスニック・ミュージアムを訪問して、イメージ構築せよ」との極端な表現をとらないまでも、大都市既成市街地の例えば旧チャイナタウンの存在性は、「大都市の中のムラ」規定やリアリティの捉え方の問題は別としても、すでに言及のインナーサバークを中心に郊外部に進出の現代型エスニック・コミュニティに新居住する越境移動者や、彼らの子弟にとってどのような繋がりが残されているのか。基本的には大都市旧市街地と郊外地とのパイプはもはや断たれているが、例えば中国系の郊外移動者にとって、旧市街地のチャイナタウンは時折の飲食やショッピング、観光、歓楽の場所、

あるいはビジネス上の取引や情報交換の場、特に「大都市郊外生まれ、郊外育ち」の子ども達にとって、母国との民族アイデンティティを保持する、あるいは育成するシンボル・コミュニティとしての位置は持ち続ける。

また越境移動者や家族にとっての母国から見た、例えばニューヨークの旧チャイナタウンや中国系居住コミュニティは、どのような存在性として捉えられているのか。これまでの都市社会学上の学説では、アメリカ大都市でのチャイナタウンの存在は、「都市の中のムラ、あるいは島」の別表現として「都市の中の飛び領土 (enclave)」として捉えられてきた。しかしこの表現自体も、情報や資本、エスニック・ネットワークがグローバリゼーション化する中で、例えば中国にとってニューヨークのチャイナタウンとその周域の存在性は、国境をこえたもう一つの、あるいはもう一つ先の「飛び領土」として捉えられ出している。

このことは、池袋や新宿の新実態についても例外ではなく、例えば中国や韓国の上からの政策ネットワークと越境現場で繋がるコミュニティ・オルガナイザー、情報収集者の役割を持つキィ・パーソンが配置され出しているとの未確認情報もある。

「下からの」トランスナショナリズム、政策意志の生成とは明らかに系譜を異にするが、しかし大都市インナーシティの越境する「文化、資本、エスニック・ネットワーク」の領野拡大に合わせて、さまざまなレベルの「横からのインパクト」が働き出すことも否定できない。

2.2 都市コミュニティ調査の新しい階梯——「国際比較」と「ケース・スタディ」との間

(1) 越境大都市インナーシティ相互のレファレンスを

越境移動者の国内流入と国外送出を媒介する大都市インナーシティを磁場とする「変容する都市コミュニティの普遍」の都市社会学調査上の主テーマは、関西学院大学 COE サブ・テーマ「文化的多様性」への筆者の一つの回答でもある。すでに述べたように、二極分解の「都心」と「郊外」を結ぶ第

3の空間（thirdspace）としての大都市インナーシティは、越境移動者の能動的、積極的な生き方と都市的生活様式を媒介として、大都市衰退地区の再活性化（revitalization）が政策的にも問われた。例えば、環太平洋圏内での越境移動者に関していえば、筆者らの都市社会学上の主テーマであった越境アジア系ニューカマーズと東京、大阪大都市圏の大都市インナーシティの受容過程は、例えばオーストラリアやアメリカ西海岸の大都市インナーシティ現場と、共通の「トランスナショナル・ソーシャル・フィールド」を形成する関係にある。1999年に開催された早稲田大学アジア太平洋研究センター主催の国際シンポジウム「Asian Migration and Settlement: Focus on Japan」の、池袋／新宿の実態調査報告では、やはり越境アジア系ニューカマーズを受容、あるいは送出している東アジア、東南アジア諸国の社会学者らと、共通の「トランスナショナル・ソーシャル・フィールド」で有意義に議論できた新鮮な記憶がある [Hirano et al. eds., 2000]²⁾。そしてこの国際シンポジウムは、右肩上りの20世紀システムの大都市像を所与としたやはり前述の都市社会学者、建築・都市計画家が一堂に会した国際シンポジウム議論（ハーヴァード G.S.D. 東京セミナー）とは、明らかに異質であった。

(2) ダイナミック・コンパラティブの手法を

例えば個別としての「変容する都市コミュニティの普遍」のテーマを、越境する大都市インナーシティ相互のレファレンスを通じて解明する。これまでの大枠としての「国際比較」の手法では、大都市インナーシティ相互の国際間、体制間のスタティック・コンパラティブの手法が、支配的であった。しかし池袋／新宿調査では、時間軸、空間軸を相互にレファレンスするかたちでの「変容する都市コミュニティの普遍」のダイナミック・コンパラティブの手法が、採用される。

例えば図1を参照しつつ、「変容する都市コミュニティの普遍」をテーマとする都市コミュニティ接近法で、時間軸の「Number of Time Periods」と空間軸の「Number of Communities」をタテ軸、ヨコ軸とすれば、「複数の時間」「単数のコミュニティ」の第1象限を uni-trend analysis、「単数の時間」



	NUMBER OF TIME PERIODS		
	<u>One</u>	<u>One</u> Case study	<u>Two or More</u> Uni-trend analysis
NUMBER OF COMMUNITIES	<u>Few/Many</u>	Static comparative	Dynamic comparative

図1 TYPOLOGY OF COMPARATIVE ANALYTIC COMMUNITY
STUDY APPROACHES [Swanson & Swanson, 1977: 8]

「単数のコミュニティ」の第2象限を case study、「単数の時間」「複数のコミュニティ」の第3象限を static comparative、そして「複数の時間」「複数のコミュニティ」の第4象限を dynamic comparative と規定している。筆者が大都市インナーシティを磁場として、トランスナショナルに時間軸、空間軸を照応させながら比較動態分析を試みる手法は、この第4象限の dynamic comparative に当たる。

ナショナル・レベルの静態的な「国際比較」は言うに及ばず、複数のコミュニティの static comparative は、特定の時点での複数のコミュニティ間の静態的な比較分析である。特定の時点、単数のコミュニティの場合には、case study の象限となる。

複数のコミュニティを、複数の時点で相互レファレンスしながら動態分析する手法が dynamic comparative であるが、特定の大都市インナーシティを磁場とするコミュニティを対象としながらも、トランスナショナルな他の単一ないし複数の大都市インナーシティ・コミュニティと時間単位、空間単位を少しずつずらしながら動態的に相互レファレンスする手法が、筆者らの池袋／新宿調査スタイルである。この意味では筆者らの立場は、先の第4象限 dynamic comparative の一バージョンともいえよう。

2.3 設問「あなたの人生にとって、日本での生活はどのような意味を持つと思いますか」

(1) 生きかたの工夫・設計

筆者らの池袋／新宿調査は、大都市インナーシティの地域現場での参与観察によるケース・スタディを含め複数の調査手法が採用されているが、1988年の第1回調査から、2003年に至るまで一貫して採用されていたのは、厚みある質問調査票を必携しての面接調査法の実施である。1票小一時間にも及ぶ面接調査法の実施は、さまざまな困難をとまうが、しかし interviewer と interviewee との対面による人格的なコミュニケーション過程を含め調査票使用は、筆者らの現地調査のいわば生命線をなしている。しかしこの調査票使用も、年次ごとに次第に困難になってきている。

1988年の第1回池袋調査では、越境のアジア系ニューカマーズが比較的特定の地区、アパート群に集住していた関係もあって、被調査者を特定化しやすかった。それに何よりも、越境ニューカマーズ個人がインタビューを受けることに意欲が高くて、不便な日本語でもコミュニケーション自体を楽しむ風情があった。第1回池袋調査では実は「越境ニューカマーズ用」と地元の「日本人用」の二本立てが用意されていた。ところが、地元の町内会会長、商店主、地元お世話役高齢者、保育園、小学校の先生その他の地元「日本人」側の回答は、「そもそも外人の連中は……」と面接に当たった学部、大学院学生の士気を喪失させるものであった。「地元日本人」向けの調査票は第1回池袋調査だけで終わったが、2001年度に入って第1回池袋調査の原点ともいえた東池袋4・5丁目（旧、日出町）の再訪問調査をした若手社会学者が、当時の地元有力者層に「1988年に地元で立ち会ったあなたがたが、いま当時のアジア系の方々にもしアドバイスすることがあれば、それは何か」とたずねたところ、「アドバイスなんて、おこがましい。むしろ、自分達は彼らに励まされた。彼らに感謝することこそあれ、何も援助してあげられなかったことが恥しい」と口ごもりつつ話した言葉を紹介している。この点では2001年度以降に、改めて地元「日本人」向けのインタビュー調査

が用意されてもよい。むしろ第1回の池袋調査の「地元日本人」版は、彼らのタテマエ的回答をひき出した。筆者らの「アジア系外国人と地元日本人」のテーマ設定そのものに、再考の余地があったのではと、反省される。

「池袋／新宿調査、1988-2003」の範型をなした第1回池袋調査（1988）の面接調査票（外国人用）は、設問数25、その半数は自由回答欄を含むものであった。調査票全体の鍵質問は、次の4問であった。

- Q1 あなたがこの国に来たのは何故か？
- Q2 あなたが耐え忍んだ（endured）事柄は何か？
- Q3 あなたが育んだ夢（dream）は何か？
- Q4 あなたがリアリティをもって受けとめた新しい発見、出来事は何か？

この鍵質問は、アメリカのある都市コミュニティの第一世代移民136名を対象とした面接調査から引用した。移民の民族・人種系統が一人ひとり差異性があると思われる20歳台から100歳台136名のディテールな口述生活史誌は、*American Mosaic* と題した部厚い社会学モノグラフに収録されている [Morison & Zabusky, 1993]。

同書では一人数時間に及ぶ面接インタビュー調査の鍵質問から示唆されるように、例えば「出稼ぎ型外国人労働者」とか「被差別・偏見」の対象として第一世代移民を特殊的に捉えるのではなく、同じコミュニティに居住する一人ひとりの市民として、その人の生き方や生活設計の工夫が、さまざまな困難・障害や夢を含め自然に語られている。

例えば「出稼ぎ型外国人労働者」「ゲスト市民」を含め被差別や生活困難が日本の越境移住者の発想前提をなすのとは違って、むしろ先の *American Mosaic* の4つの鍵質問を柱とする各質問項目を用意した。そこでは、特に越境ニューカマーズ一人ひとりの能動的、積極的な生き方と生活設計の工夫に、焦点が合わされていた。1970年代以降の越境ニューカマーズの生き方は、地元ではいわば儒教的エートスと受けとめられた節もある。また彼らも

そのような受けとめられ方を、生き方の戦略とした側面もある。アメリカ大都市では、越境アジア系（特に在米コリアン）の属性の諸特徴「粘り強さ、勤労意欲、学歴達成の高さと起業家精神」「勤勉、教育、功績、そして儉約心」その他のいわば儒教の価値観を、失われた「ピューリタニズム」の復活と読みかえた節もある³⁾。

池袋／新宿調査の質問票の最後の一問は、筆者が1988年から2003年まで訂正なく採用し続けたが、それは次の問いであった。

Q あなたの人生にとって、日本での生活はどのような意味を持つと思いますか？

設問の趣旨がやや難解で回答しづらいが、この最後の設問に接すると、被調査者はやや威儀を正して、言葉を選びながら長めの言辞を綴るのが通例であった。第一次池袋／新宿調査当時のアジア系ニューカマーズには、面接調査への各回答を通じて、もともと内在していた自らの意志、意見を表出したい動機づけにかられた一面がある。最後の質問への回答の背景には、越境ニューカマーズにとって物質的なものよりも、むしろ自らの生活や人生の意味を問うスピリチュアルなものへの志向が、読みとれる。

(2) 量的方法と質的方法との間

個別インタビューによる調査票は、1988年から2003年にかけて若干の空白期を含むものの、その年度で最低100サンプルの回収票をめぐり、実施してきた。そして、その集計・分析成果は、年度ごとに公表してきた⁴⁾。単年度100有効サンプルの回収は、データ集計・分析の計量的表示の最低限の数字であるとともに、データ・ベースによるサンプリング工程が不可能な条件のもとでの、筆者らの面接能力の限度でもある。

しかし同じ100サンプルでも、「自由回答」の質問形式を多用する中で、綿密なアフター・コーディング作業と並んで各コードに該当するサンプルの属性やプロフィールをプライバシーに触れないかぎりにおいて注記する製表

スタイルを採用している（一例として、奥田・鈴木 [2001]）。回収調査原票全体として各サンプルのよりディテールな情報を収録するという手作業スタイルは、数理社会学者・川端亮によって「量的分析と質的分析との折衷方式」と名付けられている [川端, 1998: 266–267]。この折衷方式の表現には、量的分析、質的分析ともに“中途半端”というイメージがつきまわっているが、それでも池袋／新宿調査のフィールドの前衛は、量化と質化との間にこそリアリティの捉え方がある。

面接調査に携わった学部・大学院学生の中から、被面接者個人あるいは家族、隣人・仲間集団等とのパーソナル・ネットワークを結び、例えば第二世代の子ども達のアイデンティティーズと人生設計、錯綜するパーソナル・ネットワークと「中間集団」、エスニック・ビジネスと起業家精神、開かれたコミュニティ・スクールと外国人児童、変容する越境住宅市場その他のテーマと結ぶ参与観察による本格的ケース・スタディに入った大学院学生も少なくない。そしてこのケース・スタディが、博士学位請求論文のテーマと内容の骨子をなしている。

しかし一方では、この量化と質化との折衷方式のデータ・ベースをなす最低 100 の有効サンプル確保も、2000 年あたりを境として、決定的に困難になってきている。第 1 回池袋調査（1988 年）当時は、すでに言及したように、例えば東池袋 4・5 丁目（旧、日出町）をフィールドの中心として、同地区の例えば木賃アパート群とその界隈をターゲットとして、集中的にインタビュー調査を実施した。同調査スタイルを採用できたのも、1992–1993 年あたりまでで、越境ニューカマーズは住宅様式と居住の場所を急速に変更し出した。それは越境ニューカマーズの急テンポの *assimilation* 過程と都市的生活様式の問題でもあるが、2000 年前後では 100 の有効サンプル確保は、筆者らにとっての到達目標値となった。住まい訪問を原則としているが、特定の街区でどこが外国人居住者の住まいか、日本人の住まいかを識別することが困難である。次第に住宅訪問から、ストリート上の人、あるいはストリーートの界隈にたむろしている人達、商店やファミリー・レストラン等にまで

面接の場所をひろげた。ストリート上の方は、居住場所と違って面接対象を絞りやすいが、それでもストリート上の方は買物や遊び、専門学校やビジネス、観光等を目的にしている「若いシングルの人」が多い。筆者らの調査意図とはやや異なる人達である。このストリート上の若い人達を、筆者は「ニュー・ニューカマーズ」あるいは「新到着組 (newest arrivals)」と名付けている。ニュー・ニューカマーズには、例えば同じ中国でも国内地方出身者が国内大都市を経由して越境移動する若者やひろく東南アジア諸国からの越境移動者が目につく。彼らは1988年当時のニューカマーズと比べて、「身軽・気楽」「遊学気分」その他が目につくが、同じストリート上で面接したニュー・ニューカマーズで、「1988年当時、日本に向けて出発した同郷の友人を、母国で見送った。その後、日本での情報をくりかえし友人から受けているうちに、自分自身の人生の転機をどうしても図りたくて」と10年遅れの来日組であることが判明したケースもある [奥田編, 2001, 2002, 2003, 2004]。

例えば筆者らの面接調査のメジャー・フィールドをなす新宿既成中心市街地周辺では、町丁別単位の「外国人登録人口」が、12、3% 台から15% 台であるが、中には歌舞伎町とストリート1本を隔てた大久保2丁目では、「外国人登録人口」が30% 台である (図2参照)。

シカゴ都市社会学者の Richard T. Taub の *Path of Neighborhood Change* によると、シカゴ大都市旧市街地界隈の居住コミュニティ単位で、黒人人口比率が白人人口比率とのバランスで30% 台に達した時には、その居住コミュニティ単位は黒人コミュニティ (Black community) と規定できる [Taub et al., 1984]、と指摘されているが、池袋/新宿調査地区ではどうか。かりに外国人登録人口が30% 台に達した新宿の特定の町丁目を、シンボリック・コミュニティの戦略としてコリアン・タウンとして規定することは可能だが、そこに他の町丁目と区別された特殊なローカル・エスニック・コミュニティのシステムが維持されているわけではない。筆者らの池袋/新宿調査では、むしろ既成中心市街地界隈の複数の特定近隣住区単位にターゲットを絞

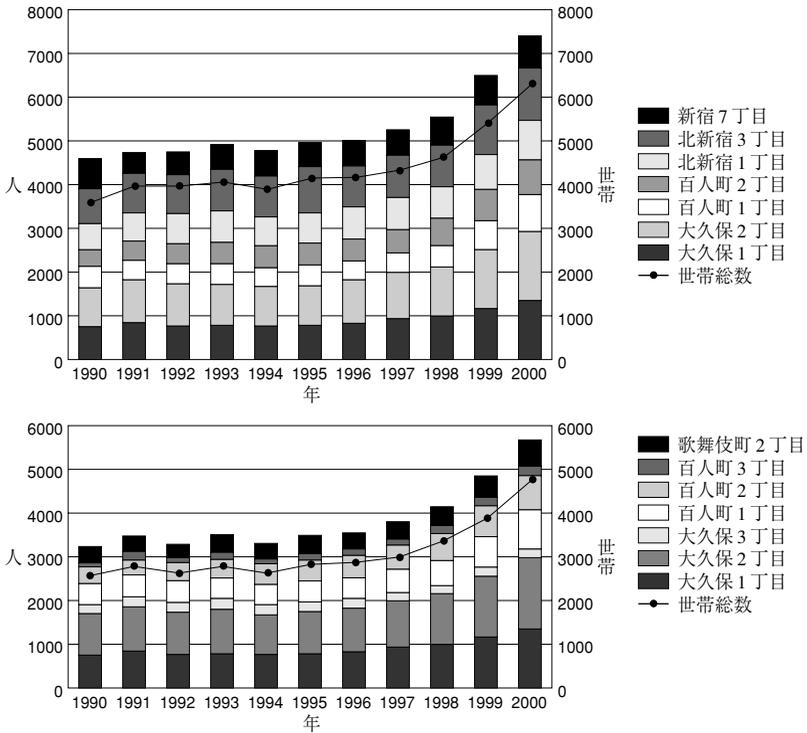


図2 集住エリアにおける外国人居住者の推移 [奥田, 2004 b: 272]

って、一戸一戸のドアをノックするかたちでの「悉皆調査」方式が採用されてよい。そこでは、被面接者一人ひとりのフェイス・シート項目を尋ねる中で、その人の民族、国籍アイデンティティを確かめるより他ない。

筆者にとって、エスニック・コミュニティと同様に居住する人が来住の「外国人」か、地元の「日本人」かを区分けするのは、一種のフィクショナルな作業である。むしろ越境移動の来住歴や民族・国籍アイデンティティにおいて、相互に異質・多様な人びとをゆるやかに内包するコミュニティこそが、「変容する都市コミュニティの普遍」、あるいは下からのトランスナショナルリズム等の主テーマによる、ふつうの都市コミュニティの様相といえよう。

それにしても筆者ら都市社会学者が、近隣住区単位ごとの悉皆調査スタイルを、最先端の都市コミュニティ調査で正式に開始する段階をむかえたことは、戦後日本の社会調査史の皮肉である。

3 厚みあるリアリティの捉え方

3.1 大都市インナーシティを磁場として

ここで、「第3の空間 (Thirdspace)」としての大都市インナーシティの現場に再び立ち戻りたい。筆者らの継続調査のいわば原点が、第1次池袋／新宿調査にあることは、くりかえすまでもない。越境アジア系ニューカマーズとの出会いのあった1988年以前に、「大都市衰退地区の再生」をタイトルとしたこの調査の実質上の開始があったものの、筆者らの調査にエポックを記した1988年は象徴的な時期と記されてよい。1年おきの小刻みの時期区分ではいわば「近隣住区変容」の足跡 (paths of neighborhood change) を辿る話でしかないが、10年単位でその後の経過を掌握すると、「社会変動」の側面が浮き彫りにされる。

しかし16年後の現在、ひろく東アジア、東南アジア他を背景とする越境アジア系ニューカマーズ調査で、1988年当時の越境ニューカマーズの能動的、積極的な生き方と都市的生活様式が一つの準拠枠組をなしていることに変わりない。また大都市インナーシティの現場自体、いわば「錯綜体都市」の様相を呈しながらも、越境アジア系ニューカマーズの受容に当って、すでに紹介した「歴史的には国内地方出身者を受け入れた土地柄でもあって、移動する人のプライバシーには立ち入らない、寛容の気風があった」という水脈が生きていた。

また社会的背景を異にするが、「在日」の人びとの歴史的根茎が、アジア系の人びとを異邦人視することへの痛覚として働いた事情も見逃せない。最初の越境アジア系ニューカマーズの能動的、積極的な生き方と彼らの抑止力ある交際術がその後のニュー・ニューカマーズの来住にマイナス要因として

働かなかったことはすでに言及したが、この点については1970年代以降の越境アジア系ニューカマーズについて、アメリカ合衆国その他の大都市においても、同様のことを指摘できる。例えば「アメリカ合衆国への越境韓国系ニューカマーズは、出身階層、学歴、プロフェッショナルな職業的訓練、収入その他の諸属性において上位にあり、母国での諸属性のクロスセクションではない」との指摘がある⁵⁾。

この越境ニューカマーズの階層的ポジションと彼らのアスピレーション志向は、韓国系と同様、中国大陸系、ベトナム、インドネシア系の一部についても指摘されることだが、例えば受け入れ国にどのような問題群が潜まっているのか。

3.2 トランスマイグラントの子ども達と Assimilation Theory をめぐる疑義

社会的問題の一つに、「海外移民の受け入れ社会への同化・融合過程＝assimilation theory」の現実有効性をめぐる疑義がある。例えば、カリブ海諸国から合衆国東海岸大都市への越境移民（難民、密航組を含む）を受け入れたニューヨーク、ボストン他的大都市、またアジア系、ヒスパニック系新移民を迎え入れた合衆国西海岸大都市についてアシミレーション過程の調査研究を進めている、プリンストン大学、カリフォルニア大学（サンジエゴ校、デーヴィス校）などの各移民研究センターは越境新移民の総合実態調査プロジェクトの世界的新拠点であるが、受け入れ大都市や合衆国体制への同化・融合モデル＝assimilation theory については、すでに到達目標や道筋のモデル理解が得られたと結論している。現在かかえている assimilation theory の調査研究上の焦眉は、例えば「ニューヨーク生れ、ニューヨーク育ち」の越境新移民の二世の子ども達、あるいは親世代と連れだって越境した1.5世代の子ども達についての assimilation 過程である。これまでの assimilation 理解からすれば、「ニューヨーク生れ、ニューヨーク育ちの新移民の子ども達」は、親世代以上に会話能力、ライフスタイル、アスピレーション志向、

アメリカ市民感覚他において、到達目標にアクセスしやすいと考えられる。確かに一般理解からすればその通りだが、トランスナショナル・コミュニティ、下からの (from Below) トランスナショナリズム等の新コンセプトを提起した Alejandro Portes、Rubén G. Rumbaut らを擁したプリンストン大学の総合調査プロジェクトでは、早くに新移民の子ども達のケース・スタディを含む総合調査を手がけ、次の結論を見出している (例えば、Rumbaut & Portes [2001 a], Levitt [2001], Alba & Nee [2003] 他)。

一般的に言って、新移民の子ども達 (children of immigrants) は、親世代に比べて assimilation 過程をめぐる到達目標に容易に達する。しかしこの同化・融合過程は、単線的であるとは限らない。最近の調査結果では、例えばカリブ海諸国から難民、密航組を含めたトランスマイグラント (transmigrant) らは、従来の assimilation theory では、「ハイチ人→ハイチ系アメリカ人→アメリカ人 (またはアフリカ系アメリカ人)」の過程を辿る (図3参照)。ところが、トランスマイグラントの子ども達は、アメリカ人 (またはアフリカ系アメリカ人) の到達点をむしろ出発点として、「アメリカ人 (またはアフリカ系アメリカ人) →ハイチ系アメリカ人→ハイチ人」の逆路線を辿る新実態が明らかにされてきている。この逆路線は、reactive ethnic theory と名付けられている。

これまでの都市社会学・民族/エスニシティ研究では、古典的調査レポートの表紙を、大都市ゲッターに滞留する海外移民と、ストリート・コーナー

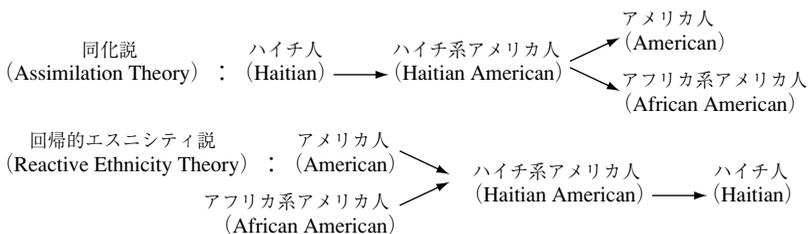


図3 エスニック=セルフ・アイデンティフィケーションの諸類型
[Rumbaut & Portes, 2001 a: 254]

に群れる子ども達のポートレイトで飾ってきた。1970年代以降のトランスマイグラントと子ども達の調査では、きちっとした身なりの両親に囲まれた男の子が、ネクタイ姿と眼鏡をかけたいかにも利発そうな姿をそこでは見せている。ボストン、ニューヨークのトランスマイグラント実態調査に携わった日本の都市社会学者の一人は、次のような感想を述べている。

筆者は……都市社会学の古典として周知の、H. ガンス (H. Gans) 『アーバン・ビレイジャーズ』と、P. レビット (P. Levitt) の『トランスナショナル・ビレイジャーズ』の2冊を並べて次のように述べた。

越境者ということで見れば同じムラ人という題名を冠したこの2冊には、時代や民族の違いを超えて、決定的な違いがある。H. ガンスのそれは、アメリカ大都市のなかに定住し、同化のなかで消え行く濃密な関係性＝ムラ人 (villagers) を描いているが、しかし、P. レビットのそれは、アメリカ社会にかかわりつつも、決して同じ出身地との濃密な関係を失わず、むしろそうした濃密な人間関係を維持しつつ、国境をこえて、生きるムラ人を描いている。この2冊の本の表紙にはともに、移民の子供の写真が描かれているが、P. レビットの本の表紙の子供は、両親にはさまれて、将来は社会的に上昇していくことを予測させる、ネクタイを締めて屈託のない笑顔が印象的である。[広田, 2003]

しかしプリンストン大学、カリフォルニア大学のトランスマイグラントの子ども達の大規模調査が進むにつれて、先の逆説的 assimilation theory の新実態が明らかにされている。この新実態は、トランスマイグラントの子ども達の、制度としての「アメリカ市民 (Americans)」への路線を、直ちに否定するものでない。「アメリカ市民」としての制度上の受容と「ハイチ人」としての民族的アイデンティティとは、必ずしも矛盾するものでない。

ただし逆説的 assimilation theory を提示したポルテスとランバート (Alejandro Portes & Rubén G. Rumbaut) は、同 theory を解くキー・コンセプトとし

て「legacies」を提示している[Rumbaut & Portes, 2001 b]⁶⁾。「legacies」とは「受け継いだもの」「負の遺産」を意味する。つまり越境移民の親達が、受け入れ地であって、その社会の規範に沿うかたちでの躰や教育、行動規範のモデルを課した。そのことが何程かのサクセス・ストーリーを生み出しはしたが、反面、自らの存在証明としての民族アイデンティティを犠牲にした側面もある。そのことは、自らの人種、血統等への先祖帰りというよりも、自らの存在証明としての生き方の様式や意味を問う、構築上のアイデンティティーズでもある。

この構築上のアイデンティティーズ問題は、カリブ海諸国からのトランスマイグラントに限らず、先のアジア系、ヒスパニック系トランスマイグラントについても指摘できる。特に台湾系、中国大陸系アジア移民のモデルをなしていた華僑、新華僑は、漢民族中心であったが、1980年代の中国大陸の改革・開放後、国内少数民族、特にイスラム系新疆ウイグル人が北京、上海、広州等の大都市に移動、パーソナル・ネットワーク型居住拠点を築くとともに、引き続き国境を越えた大量の再移動を日程化してきている⁷⁾。

能動的、積極的な生き方と高い教養、起業家精神にとむ越境新疆ウイグル人が、大勢としてはアメリカ大都市に新到着する時、これまでの漢民族中心のチャイナタウンや華僑、新華僑地図も大きく塗り替えられよう。特に「成熟と洗練」を旨とするイスラム系の民族性とアイデンティティ問題は、先の reactive ethnic theory について、もう一つの新しい頁を加えるに違いない。

3.3 「上からの」制度化への個別対応

筆者らの池袋／新宿調査においては、アメリカ合衆国と日本とでは定住権や国籍をめぐる制度上の対応が大きく異なるので一概に傾向性を指摘できないが、それでも日本で居住生活者としての実績を積み重ねる中で、個別としての定住権や国籍を取得するケースが漸増化してきている。しかしこの資格取得も、越境移住に際しての優先度の高い ID カードといった意味もある。

この点では日本での制度上の受け入れの第1号ともいべき日系中南米人

については、横浜市鶴見区他の実態調査結果では、住居や就業、学校等の受け入れ条件がある程度整っているものの、受け入れ制度と日系中南米人の生活機会との乖離が大きく、特に1.5世代といわれる来日の子ども達が成人期に達している場合、民族アイデンティティや人生設計をめぐる揺れ幅が目立ち、例えば自らを「ブラジル人」としてのアイデンティティを表白し、日本人のルーツについても、沖縄人出身者が多数派を占めていたところから、「沖縄人」としてのアイデンティティ帰結のケースが、一つの大きな傾向性を示している [広田, 2003]。

筆者らの池袋／新宿調査プロジェクトを仲立ちとして、越境アジア系ニューカマーズ一人ひとりの能動的、積極的な生き方と都市的適応様式その他について、アメリカ大都市の最新のトランスマイグラント研究等と相互参照しながら、アメリカ大都市の最新のトランスマイグラント研究等と相互参照しながら、トランスナショナル・コミュニティ、「下からの」トランスナショナルリズム・アーバニズムその他の問題群への手掛かりを示した。

越境ニューカマーズの生き方の意味を、ライフコースに応じて絶えず問い、また現住地を回路として母国を含め諸国の大都市事情や人的ネットワークの中で自らのポジションを確かめる人生設計の様相は、特筆しておいてよい。

すでに紹介した、筆者らの面接調査票での最後の質問「あなたの人生にとって、日本での生活はどのような意味を持つと思いますか」について、越境アジア系ニューカマーズが自らの人生キャリアをふりかえりつつ真面目に回答する姿も、納得できよう。彼らアジア系ニューカマーズの子ども世代は未だ中学校進学期をむかえる段階だが、定住権や国籍をめぐる制度化が不透明であるだけに、子どもの将来設計を視野とした母国を含む他国への再移動、また制度化がそう遠い先の話ではないと見込んで、子どもの教育環境を含む大都市郊外移転の動機づけも促されている。ニューカマーズ比率の高い新宿・大久保小学校で、下校時さまざまな民族性をあらかず呼び名が飛び交っている光景に出くわす。「日本で生活している以上、日本語の教科書を使い、

「日本人」として振舞うのは当然だ」と冷めた回答をする第2世代児童もいる〔奥田・鈴木, 2001: 191〕。

親世代が必ずしも民族／エスニシティ同定をめぐるロール・モデルでない以上、むしろ自覚・意志的に内部化された民族／エスニシティ項目は、属性原理 (ascribed status) というよりも達成原理 (achieved status) として判断できるかもしれない。それぞれ文脈を異にするが、『たった一人のクレオール』『一人称で語る権利』『当事者主権』その他のタイトルの書物が出される時代である〔上農, 2003; 長田, 1984; 中西・上野, 2003〕。

3.4 都市コミュニティの新定義

大都市大規模郊外化過程にフィールドを求めた筆者自身の都市コミュニティの規定は、4半世紀を経過して、既成郊外・都心の各一部を含む「大都市インナーシティ」にフィールドの焦点を合わせて、都市コミュニティの新規定を以下のように呈示した。

さまざまな意味での異質・多様性を内包した都市的な場であって、人びとが共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして結び合う生成の居住世界（〔奥田, 2004 b: iii〕再掲）

この都市コミュニティの規定は、外延的にはトランスナショナル・コミュニティ、下からの (from Below) トランスナショナリズム他のコンセプトと、内包的には錯綜体都市・グラスルーツ版、空間「機能から様相へ」、ルース・コネクションズ (loose connections) 他のコンセプトと、それぞれ結び合う。

そして、この21世紀の都市コミュニティの規定は、文脈を異にするが、関西学院大学の21世紀COEプログラム『『人類の幸福に資する社会調査』の研究』のサブタイトル「文化的多様性を尊重する社会の構築」に共振していることを、再度注記しておきたい。この意味ではCOEのメイン・タイト

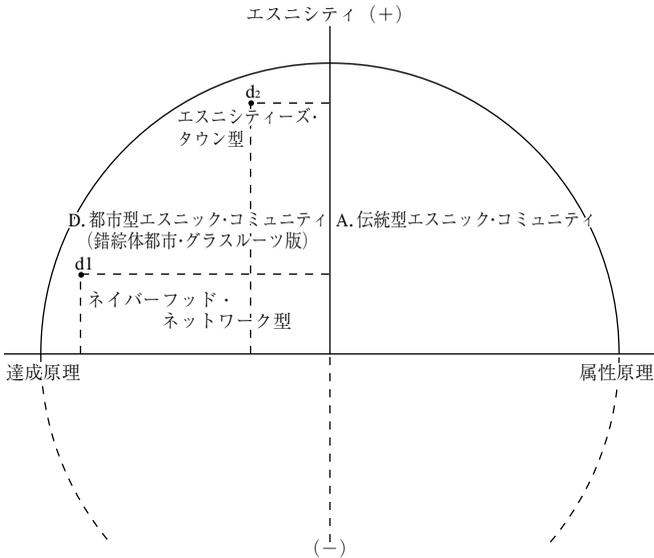


図4 都市コミュニティの諸類型 [奥田, 2004 b: 197]

も、所与の世界システム、あるいは国家像を主テーマに照らしてスタティック・コンパラティブを進めるだけでなく、例えば越境移動する諸個人や家族の生き方と都市的生活様式から、大都市インナーシティ他を磁場としてダイナミック・コンパラティブを進めるケース・スタディの調査手法がもっと開発されてよい。

3.5 モデルから異質認識へ

ところで、先の都市コミュニティの定義に照らして、筆者らの池袋／新宿の調査現場に視線を移した時、町丁目単位で一体誰が「外国人」で「日本人」なのかの見分けが住区単位でも住まい界隈の状態からも、もはや不透明である。地元日本人自体についても、「いわゆる日本人らしくない日本人とは何か」の調査テーマ解明が、すでに進められた。

アメリカの大都市インナーシティの地域現場については、「比較的まとも

りのある隣り合わせの近隣住区＝ネイバーフッド単位でも、ストリートを1本隔てると、居住者の階層や民族・人種系統、教養、都市的生活様式、住宅の条件、ときにラップ音楽の流れが変調し出す」と指摘されているが、このことは程度の差こそあれ、池袋／新宿の調査地界限についても指摘できる。

「空間〈機能から様相へ〉」「都市の変貌＝ミューテーションが加速されている」「混沌の力」その他の表現を再び借りなくても、池袋／新宿他の調査現場の異質・多様性内包の臨界点は、果してどの辺にあるのか。ここでの臨界点は、上からの制度的仕掛けや市民的世論の動員化の動きともからみ、一概に特定化できない。むしろ筆者にとっての関心は、さまざまな意味での異質・多様性を内包する近隣住区にあって、拡がりとも賑らみのある柔らかな現実が、どのような関係性の仕組みに支えられているのかを知りたい。個々のケースの傍証を通して、筆者がこれまでに採用してきた「ルース・コネクションズ (loose connections)」や「ゆるやかな絆」の新実態を説明することは、可能である [Wuthnow, 1998]。しかし本稿での関心は、この新実態を説明する居住者共通のコード化としてひろく採用されている「都市共生の作法」他の検討にある。

4 発想としての「都市共在感覚」

4.1 例えば「都市共生の作法」から「都市共在感覚」へ

筆者自身、「共生 (life together, living together)」というコンセプトを、第1回池袋調査当時の「アジア系外国人と地元日本人との住み合いの新実態」を説明するコンセプトとして当てた。この「共生」は、その後都市社会学をはじめ社会科学上の新コンセプトとしてひろく採用されている。筆者自身も、先の「都市共生の作法」他、このコンセプトの補訂に努めてきた (例えば、奥田 [1996: 233-278])⁸⁾。

しかし大規模新郊外化にともなう新中間層型新住民を拠点にコミュニティ・モデルを呈示した1970年代当時、このコミュニティと結ぶ新中間層的価

値観念からこぼれ落ちるものへの配慮を、コミュニティに内在する問題点としてきた。支配としての「都市共生の作法」には、やはり新中間層的価値観念とそこからこぼれ落ちるものへの配慮の問題群が、潜まっている。この新中間層的価値観念の孕む問題群は、例えば「市民的公共世界」「変りゆく共生空間」「シティズンシップと再生する地域社会」他が再テーマ化され出した1990年代に入っても、引き継がれている。

さまざまな意味での人びとの異質・多様性を内包した都市的世界を、大都市インナーシティの地域現場に焦点化した時、筆者はこれまでの「都市共生の作法」を「都市共在感覚」のキーワードに変更した。そして都市コミュニティ新定義に際して（2004年）、「都市共在感覚」のキーワードを初めて採り入れた。この「都市共在感覚」はもともとが人類学者の木村大治が中部アフリカの参画型行為調査から発案したキーワードであるが、文脈を異にするものの、このキーワードは「際限なく繋がる関係性の中で、人びとはいかにして〈共に在る〉のか」の新実態を、下から捉える発想に他ならなかった[木村, 2003]。

この共在感覚は、共生とかコモンス等の特定の価値観念に枠づけられていない点で、越境する大都市インナーシティの厚みある地域現場の様相を、率直に筆者らに伝えてくれる。この共在感覚の先行する定義はないが、木村によるいくつかの状況説明を抜き書きすることで、定義に代えたい。

人と人が共にある。そのやり方がいかに多様でありうるか、アフリカのフィールドで人々と生活を共にしながら、私は身にしみてそのことを感じた。共にある態度、身構え、そういったことを呼ぶのに、ここで「共在感覚」という言葉を用いてみたい。[木村, 2003 : ii]

彼等（調査現地の人びと：引用者注）の発話の特徴は、関係が取り結ばれる空間が伸縮自在であるということだ。そのような状況では、ちまちました「人称空間のルール」などというものは設定しようがない。[同：88]

インフォーマントの家から150～200メートルの距離に引かれる線を、「挨拶境界」と呼ぶことにする。挨拶境界の内側にいる人は、挨拶をする必要がないほどに「すでに出会っている」のだと言えるが、この境界が、われわれ日本人のそれよりもはるかに遠いところに位置していることは明らかだろう。[同：107]

「大声に媒介された共在感覚」「空間的に離れていても一緒にいると感じられる場合」「feeling of co-presence、あるいは sense of co-presence」[同：155]

これらの事例は、バカ・ビグミーの人たちがこちらの視線の圧力をそれほど感じてない、あるいは受け流す術を知っている、ということを示唆している。しかも見つめるバカの側も、注意の指向性を集中してはいないようだ。…こちらのまなざしとむこうのまなざし、あるいはこちらの声とむこうの声、それら相互の志向性が過度に絡み合わずに共在し得ていること、これがバカの相互行為の特性なのだろう。[同：206]

発話の形式を調べていたときに感じていたことを、「瓦を重ねるような意味の重なり」という形で確認することができたことは、重要な成果であった。…会話という相互行為の可能性の広がりや、より広く見渡すことができる。[同：209]

フィールドワークにおいて私がもっとも「面白い」と感じたのは、土地の人々の織りなす相互行為であった。[同：305]

その社会における相互行為の構造が理解されてくるにつれて、そういった共在感覚も、それぞれ高度にソフィスティケートされた文化的構築物であると思えるようになってきた。[同：305]

越境する大都市インナーシティの地域現場の様相を、この共在感覚のキーワードで読みとくと、例えばルース・コネクションズやフラグメンテッド・コミュニティの様相も、そのリアリティの捉え方が可視的になる。具体的には池袋／新宿の調査地でのストリート1本を隔てて、というよりも回路として相互に異質・多様性を帯びる人びとが、ルース・コネクションズの相互行為をする様相を、この共在感覚で読みとくこともできよう。そして、先の

「都市共生の作法」をポストメトロポリス段階のキーワードとすれば、この「都市共在感覚」はポストメトロポリス段階のもう一つ先のキーワードと位置づけることができる。

4.2 都市エスノグラフィ編集への連なり

「共在感覚」のキーワードを発案した文化人類学者・木村大治の長年にわたるフィールドワークの成果が、前掲の『共在感覚——アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』の一冊にまとめられている〔木村，2003〕。新刊の同書は「未完」の民族誌ではあるが、共在感覚のさまざまなあり方、そしてその面白さを都市社会学上の仕事にも充分伝えてくれる。筆者には「都市共在感覚」をキーワードとして、短い一篇の都市エスノグラフィ『池袋ノート』『新宿ノート』を編集する作業が残されている。実際には1988年以降毎年のように公表してきた調査報告書『アジアの新宿／池袋——現地面接調査記録コレクションズ』を一冊のデータ・ベースに再編集する作業に終るのかもしれない。

越境する人びとが「いわゆる日本人らしくない日本人」と共在する大都市インナーシティのフィールドは、たとえで言えば、海水と淡水とが混合する「汽水域」の状態にある。この「汽水域」にはどのような相互に異質で多様性ある人びとが、共に在るのか。

筆者は「越境」大都市インナーシティの地域現場の調査にあつては、例えば「複雑なものを複雑なままとらえる」「世界自身に語らせる」を旨としてきたが、一篇の短い『新宿ノート』『池袋ノート』編集にあたつても、この調査主旨と合わせて、いわゆる都市エスノグラフィの先行するモデルとして、W. F. ホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』⁹⁾とイライジャ・アンダーソン『ストリート・ワイズ』の2冊をとりあえず挙げておく〔Whyte, [1943] 1993=2000; Anderson, 1990=2003〕。前者は「20世紀型の都市エスノグラフィ」、後者は「21世紀型の都市エスノグラフィ」と性格づけられているが、ともに大都市インナーシティを磁場とした参画型共同行為

調査 (Participatory Action Research) による見事な成果物であることに変わりない。

5 ホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』と アンダーソン『ストリート・ワイズ』 ——新しい読みと発見

5.1 20世紀型の都市エスノグラフィ

『ストリート・コーナー・ソサエティ』についていえば、ホワイトが現地調査に携わった1930年代中後期、ボストンの大都市インナーシティ現場は、イタリア系スラム、ゲッターとして理論的に政策的に枠づけられていたが、ホワイトはスラムのストリート上にたむろする非行少年グループの生態を下からの生活世界再構築を通じて捉え直し、大都市インナーシティ＝スラム、ゲッター視の誤まりを正した。

『ストリート・コーナー・ソサエティ』はその後版が重ねられ、合衆国はもとより世界各国のその時点での「新しい本」として読み継がれた。しかし大都市インナーシティ＝スラム、ゲッターの捉え方が学界、政策レベルでただされるには、初版から50年の経過が必要であった。ちょうど50年後の1993年に、「50周年記念拡大増補版」の日本語新訳が刊行されたが、同書に寄せられたホワイトの序文が、彼にとっての最後の一文となった。

万事に控え目で、温容力のあるホワイトは、次の文章を明晰に記している。

「ただひとつのケース・スタディだけで、普遍的な結論を導くことができるのだろうか。私はそのことが可能だということを示そうとした」¹⁰⁾

5.2 21世紀型の都市エスノグラフィ

『ストリート・コーナー・ソサエティ』初版から50年後に、もう一冊の

E. アンダーソンの『ストリート・ワイズ』が刊行されている。21世紀システムの都市エスノグラフィと目される同書は、やはり大都市インナーシティを地域現場としているが、そこでは、スラム、ゲットー視は後退して、ポストメトロポリス段階の「第3の空間」としての位置づけが図られている。具体的には大都市衰退地区の再生のもう一つ先のテーマである、ひろい領野の再生コミュニティが、アンダーソンにとってのメイン・フィールドをなしている。調査地は2004年の現在も匿名のままであるが、おそらくフィラデルフィア大都市旧市街地周辺の再生インナーシティと推察される。地域現場にあって居住生活者であると同時に社会学者（ペンシルベニア大学教授）であったアンダーソンは、地域でのさまざまな出来事をディテールに参与観察し、記述・分析する。しかもこれまでもっぱらインフォーマントとして扱われたアフリカ系のアンダーソンは、観察者と被観察者の相互の役割をスイッチする中で、再生コミュニティでの人と人との関係性や出来事を内部から捉え返す、鋭い視線がある。

アンダーソンは再生コミュニティに居住する人びとの多様化世界について、次のエピソードを伝えている。

1975年に妻のナンシーと共にヴィレッチに移り住んだ時には、この地域について研究しようという意図を持ってはいなかった。しかしローカル・コミュニティと出会い、それが理想的な都市実験室であることを発見することで私の考えは変わった。ヴィレッチが文化面でもエスニシティ面でも、最も多様な広がりをみせる都市の一つであることに気づいたのである。そこでは、裕福な人びと、貧しい人びと、ゲイ、ヒッピー、学生、ユダヤ人、ワスプ、イタリア系アメリカ人、東南アジアからの新移民、エチオピア人、ザンビア人、パキスタン人、イラン人その他諸々の人びとが互いにある礼節をもって暮らしている。私は、自然にそういう調整を理解していった。毎日の生活の経験からまた、たまたま関わることになった出来事での経験から、他の新住者がそうであるよう

に文化的ルールを学んでいくことになったのである。そしてそれが近隣住区に対して特別な興味を抱くきっかけとなり、私は正式に研究をはじめめることに決めた [Anderson, 1990=2003: vii]。

常時居住者とともに参与観察者のアンダーソンは、メイン・フィールドの再生コミュニティのリアリティの捉え方に当たって、再生コミュニティと1本のストリートを隔てて存在する、いわゆる「アフリカ系コミュニティ」をレファレンス・グループとして再生コミュニティを複層的に捉えている。再生コミュニティの近隣住区にあって惹起するさまざまな出来事を、アンダーソンは視線鋭く観察し、そして記録する（以下の例示は、モノグラフ文中から引用者自身の適記による）。

ティーン・エイジャーの黒人少女グループが下校時にたむろするコンビニ前で、彼女らの面倒を地元で見てきたお年寄黒人女性を襲って怪我をさせ、金品を奪う事件が起きる。アンダーソンはただちにかけてお年寄の手当てをするとともに、犯行少女達にむけてのインタビューを開始する。いわば地元のオールドヘッドのお年寄を襲う事件に、再生コミュニティの今後の“変調”を予感する。

アンダーソンが愛車の盗難にあい、パトカーに同乗して街中をパトロールして車探しをする。たまたまアンダーソンの勤め先前のバス・ストップで新聞を手にした白人同僚と目を合せるが、白人警官のドライバーと後尾席のアンダーソンを窓ごしにして、あわてて新聞に目をおとす。同僚の視線の先に一体何を見たのか。

アンダーソンが裏庭の垣根ごしにリベラルで知られる白人建築家夫妻と談笑していた折に、建築家が2週間カリフォルニアに滞在して留守するので、家の管理をアンダーソンに依頼する。「どうせ奴ら（黒人のこと：引用

者注) が侵入しても、盗られるものもないしさ」と気楽に会話を続ける。

アンダーソンが街路を通行中、「ニガー、ここはお前のくるところではない。とっとと、立ち去りな」と叫ぶ男の声を背後にする。驚いて振りむくと、犬を連れて男が「ごめん、ごめん、君のことを指したのではない。ニガーとは、この犬の名前なのさ」と詫げる。

深夜アンダーソンが家路を急ぐストリート上で、小さい子供達がストリートいっぱいひろがってボール蹴りをする光景を目にする。アンダーソンは一軒のポーチに腰かけて観察をはじめますが、12時を過ぎても立ち去らない光景に、一人の子供をつかまえて「お母さんはここで遊んでいるのを知っているのかね」とたずねる。中には2、3才の幼児も混ざっている光景に驚くが、午前1時すぎ、子供達は一斉に家路へと急ぐ。一人の幼児には“見張り役”の男の子が付いていて、遊びの群れに自ずと“役割の分担”のあることを知る。

5.3 ストリート・ライフを回路として

アンダーソンにとっての調査地の再生コミュニティにあって、人びとの際限なく繋がる関係性の中で、いわば歴史的根茎としての黒人コミュニティや黒人のラベリングが影をおとす逆説がある。アンダーソンの再生コミュニティ調査にあたって、ストリート1本を隔てた黒人コミュニティは、再生コミュニティの一種のレファレンス・グループの位置をなす。ストリートは、この再生コミュニティと黒人コミュニティとを「隔てるもの」と、「繋ぐもの」との二重の役割をなす。

なおこのストリートを広義に解して、ストリート自体を現地調査前線とした参与観察が、『ストリート・ワイズ』以後の『コード・オブ・ザ・ストリート (Code of the Street)』というアンダーソンの次作をなす [Anderson, 1999]。二重の役割を持つストリートは、再生コミュニティと黒人コミュニ

ティのそれぞれの近隣住民の役割を離れた諸個人がいわば“匿名”の状態
往来し、そしてたむろする。“匿名”の諸個人が共に在る状態は、アンダー
ソンの例えで言えば、スキルフルなドライバーがたくみに人の通行や障害物
を避けてスムーズに走行する状態に似ている。これに対して、「教則」の定
本に従って運転の走法をはかるドライバーは、不意の人の通行や障害物との
“クラッシュ”をたちどころにおこしてしまう。この“クラッシュ”は、ス
トリート・ライフ上の“事件”というよりも“コスト”と見なすべきであ
る。むしろ状況適応的な“迂回”や“はずし”“ずらし”“無関心さ”が、ス
キフル・ドライバーには求められる。そして、このストリート上のスキル
フル・ドライバーの生活術、生き方の工夫こそが、熟度あるストリート・ワ
イズ感覚ともいえよう。

人種関係の多様化世界や再生コミュニティに生きる社交術の教則本に従う
と、先の“差別”発言や鈍感な行動様式とは反対に、「このコミュニティの
黒人は皆“よい隣人、友人”ばかりだ」との発言や行動振舞いが、むしろ差
別の逆説と受けとめられかねない問題がひそまっている。なお、アンダー
ソンは自らを含めブラックの表現で通している。したがって、公式用語とし
てのアフリカ系アメリカ人の表現の使用を、原則としてここでは避けた。

Code of the Street は『ストリート・ワイズ』と同様の都市エスノグラフィ
の編集様式で、彼の3部作 *A Place on the Corner*、*Street Wise*、*Code of the
Street* の最後の業績である [Anderson, 1978, 1990, 1999]。*Code of the Street*
は、*Street Wise* をやや方法論的に整序し、インナーシティの「共に在る」世
界を detached に透視した作品として読める。

大都市インナーシティの再生コミュニティとブラック・コミュニティとの
境界線をなすストリートは、インナーシティに一種の補助線をひく役割をな
すが、このストリートでは近隣住区を離れたいわば匿名の人びとが自由に往
来し、ときにたむろする。人びとの洗練された行動様式のコードとはな
にか。アンダーソンは、親切な、寛大な、感じのいい、を含意する decency、
暴力しないこと、暴力されないことの violence、そしてインナーシティのモ

ラル・ライフ (the moral life of the inner city) の3つのキーワードを特に挙げている。インナーシティのモラル・ライフは、21世紀のキーワードを引用すれば、インナーシティのスピリチュアル・ライフ、あるいはスピリチュアリティと言い換えてもよいのかもしれない。

先の Street Wise の地平と並んで、この地平の道標としての Code of the Street は、筆者の紹介した多様化世界での人びとの well-being = 共在感覚と相互に響き合う関係にある。

6 池袋／新宿調査プロジェクト以後——結びに代えて

6.1 トランスナショナルな地域を回路として——「地域間研究」の試み

以上を通して筆者は、1988年から継続的に実施してきた池袋／新宿調査プロジェクトでの成果の新しい読みと発見を通じて、関西学院大学 COE プロジェクト「『人類の幸福に資する社会調査』の研究」との接点を図ろうと努めてきた。現地調査に携わる社会学者の一人ひとりに自問自答が求められるこのプロジェクトのインパクトの大きさとともに、くりかえしになるが、少なくとも筆者にとって COE プロジェクトの副題「文化的多様性を尊重する社会の構築」は、池袋／新宿調査に求められる課題そのものでもあった。

都市社会学のフィールドとして筆者は大都市インナーシティの地域現場に焦点を当ててきた。日本の都市社会学研究のパラダイムをかたちづくってきた初期シカゴ学派を挙げるまでもなく、すでに前述したことだが、大都市インナーエリアないしはインナーシティは、国内および国際移民労働者の滞留地＝スラム、ゲッターのセグリゲーションの拠点として位置づけられてきた。大都市インナーエリア＝エスニシティ系列のスラムとの見方は、日本の都市社会学においても抜きがたくあるが、当時の時代の文脈においても、この見方が社会学的事実と反するとのアセスメント作業が試みられてきている。

それでも、都市化、産業化の右肩上りの20世紀システムのもとでは、大

都市「都心」と「郊外」の分極化のはざまに沈む灰色地域（gray area）とラベリングされた大都市衰退地区であったが、その再生が現実的契機を得た21世紀システムのもとでは、「都心」と「郊外」の両ウイングを結ぶ「第3の空間 Thirdspace」として新しいパラダイム・シフトが試みられた。

筆者は20世紀システムの大都市インナーエリアの規定を改めて、拡がり
と重層性を持つ「第3の空間」として、ポストメトロポリス段階＝大都市
インナーシティの規定を21世紀システムとして図った。この「第3の空間」＝
大都市インナーシティは、21世紀システムのいわゆる錯綜体都市のリアリ
ティの捉え方＝地域現場として位置づけられている。この錯綜体都市は筆者
の規定であるが、錯綜体都市のグラスルーツ版が都市コミュニティのレベル
に当たる。先のCOEのサブタイトルと共振する都市コミュニティの定義
を、ここできりかえすまでもない。2004年に刊行された倉沢進・浅川達人
編『新編・東京圏の社会地図 1975-90』によると、1975～1990の東京圏の
都心から郊外への発展過程は、帯状の生態学的秩序をとまなうものでなく、
モザイク都市の様相を呈していることが、モデル解析されている [倉沢・浅
川編, 2004]。

この錯綜体都市のインナーシティ地域現場が、筆者らの池袋／新宿調査の
磁場をなした。この磁場では、これまでの大都市インナーエリアや滞在外国
人労働者をめぐる見方の訂正が図られたが、越境アジア系外国人を迎え入れ
た1988年の最初の年に、面接調査を実施できたのは社会学者として倅わせ
であった。くりかえしになるが、アジア太平洋圏を移動と定住の拠点とする
越境アジア系ニューカマーズを対象として、彼らの能動的生き方とキャリア
・デザインを主テーマとして継続的面接調査の実施と年度別調査報告書の公
刊を最低限心がけてきた。筆者の調査プロジェクトにとって、特定の国民国
家や民族体制を所与の単位としたワールド・ワイドな比較調査は、視野の外
にある。むしろ、例えば大都市インナーシティを磁場とする、越境アジア系
外国人諸個人や家族の生き方、都市的生活様式等をトランスナショナルに相
互レファレンスする手法＝ダイナミック・コンパラティブを開発している。

手法としてはケース・スタディに近いが、しかし筆者の採用するダイナミック・コンパラティブは、国家や民族を所与とした諸個人や地域のスタティック・コンパラティブとは区別される。

ここでのダイナミック・コンパラティブの手法による錯綜体都市・グラスルーツ版の新しい事実発見と読みの累積を通して、筆者の都市社会学上の主テーマである「変容する都市コミュニティの普遍」も、次第に視野がひろげてきている [奥田, 2004 b]。自己弁明するようだが、筆者の調査プロジェクトがトランスナショナルに相互レファレンスする 21 世紀システムの新しい流れの潮目を大都市インナーシティの地域現場で捉えたとしても、いわば手作業的な小規模調査であることには変りない。精選された学部・大学院現役学生の調査チームを面接要員としているが、彼らの中から個別ケースの参画型共同行為調査 (Participatory Action Research) へと踏み出している者がいる¹¹⁾。

Street Corner Society のホワイトが晩年に出版した一冊が、*Learning from the Field: A Guide from Experience* [Whyte & Whyte, 1984] である。『フィールドから学んだこと』、このいわば自己学習過程が、初歩段階ではあるが、筆者の調査プロジェクトの生命線でもあった。ホワイト、アンダーソンともに、参画型共同行為調査によるフィールドワークのもっとも重い実体験は、大学院現役学生時代であった。

ホワイトが後年 Kathleen King Whyte を現地調査の道連れとしたならば、僭越ながら筆者のそれは二つの大学の学部、大学院で出会った学生有志である。一本の太い幹にたとえれば、大型の国際比較調査が目を見張るばかりに成長してきているが、筆者らの小規模プロジェクトは、せいぜいこの太い幹から派生した一本の枝葉にたとえられる。それはそれでよいが、小さな調査は、同じ大都市地域現場をフィールドとしながらも、下からの (from Below) トランスナショナルな地域を仲立ちとして横に結び合う「世界の中の地域」としての性格を持つ。

6.2 Learning from the Field——ベース・キャンプとしての「社会調査室」再考

フィールドワークの実質上の教育の場である各大学社会学系学部の「社会調査室」といえば、例えば第2次世界大戦前の東京大学でもシカゴ大学でも、社会調査室がフィールドワークのベース・キャンプとしての役割を担った。

1920-40年代に、東大構内の御殿山に面した社会学研究室のアンダーグラウンドに、「社会調査室」が開設されていた。社会調査室には折からシカゴ大学遊学から帰国した戸田貞三（1887-1955）を中心にして、家族、村落、都市、社会問題、民族その他の領域の内外現地調査に携わった社会学者にとって、「第2の社会学研究室」の趣きをなしていた。このことは、社会調査室の助手を務めていた米林富男（1905-68）から折にふれて聞いた話であり、また入手した若干の資料から傍証できている [米林, 1960; 古野, 1967; 喜多野, 1967; 牧野巽先生追悼録刊行会編, 1977]。第2次大戦後、それぞれの分野で第一線クラスの実証社会学者として知られるようになるスタッフ（シニア・クラスとしては牧野巽、喜多野清一、小山隆、及川宏、岡田謙、磯村英一ほか）が、現地調査から戻ってきては熱い議論を交わした光景は、どこかシカゴ大学社会調査室を彷彿させるものがある。各種現地調査の社会学モノグラフや、また戸田貞三によるわが国最初の『社会調査』のテキストも、米林ほかこれらスタッフのコラボレーションとしての性格が濃い [戸田, 1933]。

筆者は1962年にボストン郊外のブランダイス大学大学院に学んだが、ユダヤ系の新興大学院大学として知られたブランダイスには61年に初期シカゴの現代的再生を旨としたシカゴ生え抜きの社会学部長、エヴェレット・ヒューズ（Everett C. Hughes）が招へいされていた。筆者はヒューズから大学院のセミナー、および私的にもパークとシカゴ・マインドの社会学的思考と

方法の訓練について、どれほど聞かされたことか。当時でもシンボリック・センターとしての社会調査室は、シカゴ・ハーパー記念図書館内に遺されていたが、ここではパークのよき研究協力者、バージェス (E. W. Burgess) の次の回想ノートの一節のみを、引用しておきたい¹²⁾。

パーク博士はたいそう創造的マインドの持主であった。彼は調査研究に明け暮れた。私は夕食をとり家にいつ帰ったのか、ほとんど記憶していない。と言うのは、私たちは社会学や社会調査の理論的・実践的面について、午後から通しで議論するのに費やしていたからである。

[Burgess & Bogue eds., 1964 : 1-14]

このような「社会調査室」を傘下に置くシンボリックな施設として、人類の幸福に資する社会調査のためのアーカイヴを構築する構想が今求められている。そしてこのアーカイヴには国内、海外も含む各大学、調査機関に開かれた専門大学院もジョイント・センターとして付置されることが望まれる。

注

- 1) Whyte [1943] 訳書奥田・有里 [2000] 訳者解題に注意。他に奥田・有里編著 [2002] を参照のこと。
- 2) 特に Okuda, Michihiro : *Asian Newcomers in Shinjuku and Ikebukuro Areas, 1988-1998 : Reflections on a Decade of Research*, 343-348 ページを参照。
- 3) 在米コリアンのエートスについては、他にリー・石田 [1995] を参照。一方、いわばスピリチュアル・ライフの復活の背景 (コミュニティ版) については、例えば Baltzell [1979] を参照。
- 4) 刊行物のほんの一例として、奥田編 [1989, 2003]。
- 5) 在米コリアンが「1980年代半ばまでに目覚ましく成功したモデル・マイノリティとして一般に受け入れられた経過」については、リー・石田 [1995 : 45-113] に詳しい。
- 6) 他に Levitt & Waters eds. [2002] を参照。
- 7) 筆者の池袋/新宿の越境アジア系ニューカマーズの現地調査当時、中央大学奥田研究室にあって、中国大陸最西部の新疆自治区と、新疆ウイグル人の国内移

動、さらには国際移動過程を中継点の北京、上海、広州の各大都市におけるディテールな参与観察調査によって明らかにしようと試みた李天国 [2000] の大型社会学モノグラフに注意。

- 8) 「共生の作法」のレビューについては、例えば町村・西澤 [2000: 347-349]。
- 9) Whyte [1943] の50周年記念拡大増補版 [Whyte, [1943] 1993] は、奥田・有里訳 [2000] を見よ。
- 10) ホワイト『ストリート・コーナー・ソサエティ』第4版訳書、日本語版への序文 [奥田・有里, 2000: ii]。
- 11) 筆者らの池袋／新宿調査 (1988-2003) を共通のベースとした、その後の参画型共同行為調査他による個別としてのプロジェクトについては、例えば渡戸・広田・田嶋編 [2003] を参照。
- 12) 他に Abbott [1999] を参照。

文献

- Abbott, Andrew, 1999, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, Chicago: University of Chicago Press.
- Alba, Richard & Victor Nee, 2003, *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration*, Cambridge: Harvard University Press.
- Anderson, Elijah, 1978, *A Place on the Corner (Studies of Urban Society)*, Chicago: University of Chicago Press.
- , 1990, *Streetwise: Race, Class, and Change in an Urban Community*, Chicago: University of Chicago Press. (=2003, 奥田道大・奥田啓子訳, 『ストリート・ワイズ——人種／階層／変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコード』東京: ハーベスト社.)
- , 1999, *Code of the Street: Decency, Violence, and the Moral Life of the Inner City*, New York: W. W. Norton & Co.
- Baltzell, E. Digby, 1979, *Puritan Boston and Quaker Philadelphia: Two Protestant Ethics and the Spirit of Class Authority and Leadership* Boston: Beacon Press.
- Bean, Frank D. & Gillian Stevens eds., 2003, *America's Newcomers and the Dynamics of Diversity*, New York: Russel Sage Foundation.
- Binford, Henry C., 1985, *The First Suburbs: Residential Communities on the Boston Periphery, 1815-1860*, Chicago: University of Chicago Press.
- Burgess, Ernest W. & Donald J. Bogue eds., 1964, "Research in Urban Society: A Long View", *Contributions to Urban Sociology*, Chicago: University of Chicago Press, 1-14.
- Chen, Hsiang-Shui, 1992, *Chinatown No More: Taiwan Immigrants in Contemporary*

- New York, Ithaca : Cornell University Press.
- Fong, Timothy P., 1994, *The First Suburban Chinatown : The Remaking of Monterey Park, California*, Philadelphia : Temple University Press.
- 古野清人, 1967, 「及川君の追憶」及川宏『同族組織と村落生活』東京：未来社。
- Gans, Herbert J., 1962, *The Urban Villagers : Group and Class in the Life of Italian-Americans*, New York : Free Press of Glencoe.
- Glazer, Nathan & Daniel Patrick Moynihan, 1963, *Beyond the Melting Pot*, Cambridge : MIT Press & Harvard University Press. (=1986, 阿部齊・飯野正子訳『人種のるつぽを越えて——多民族社会アメリカ』東京：南雲堂.)
- ハーヴァード G.S.D. 東京セミナー, 1989, 「米国／日本の都市開発と建築・アーバンデザインをめぐって」1989年3月28日(セミナー報告要旨『SD』1989. 8 : 61-76, 東京：鹿島出版会).
- Hirano, Kenichiro et al eds., 2000, *Asian and Pacific Migration Journal (APMJ)* 9-3.
- 広田康生, 2003, 『新版エスニシティと都市』東京：有信堂高文社。
- 猪口孝(報告), 2003, 関西学院大学 21世紀 COE プログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究, 第二回国際シンポジウム「国際比較調査の効用」(2003年12月12日)成果報告書。
- 川端亮, 1998, 「社会学調査の歴史——計量的手法を中心に」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京：東京大学出版会。
- 木村大治, 2003, 『共在感覚——アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都：京都大学学術出版会。
- 喜多野清一, 1967, 「及川宏君を悼む」及川宏『同族組織と村落生活』東京：未来社。
- Korzeniewicz, Roberto Patricio & William C. Smith eds., 1996, *Latin America in the World Economy*, New York : Russell Sage Foundation.
- 倉沢進・浅川達人編, 2004, 『新編・東京圏の社会地図 1975-90』東京：東京大学出版会。
- リー, ジョン・石田浩, 1995, 「現代アメリカのエスニシティと階層」奥田道大編『21世紀の都市社会学2 コミュニティとエスニシティ』東京：勁草書房。
- Levitt, Peggy, 2001, *The Transnational Villagers*, Berkeley and Los Angeles : University of California Press.
- Levitt, Peggy & Mary C. Waters eds., 2002, *The Changing Face of Home : The Transnational Lives of the Second Generation*, New York : Russel Sage Foundation.
- 李天国, 2000, 『移動する新疆ウイグル人と中国社会——都市を結ぶダイナミズム』東京：ハーベスト社。
- 町村敬志・西澤晃彦, 2000, 『都市の社会学——社会がかたちをあらわすとき』東

- 京：有斐閣。
- 牧野巽先生追悼録刊行会編，1977，『牧野巽先生追悼録』私版。
- Morrison, Joan & Charlotte Fox Zabusky, 1993, *American Mosaic: The Immigrant Experience in the Words of Those Who Lived It* (revised edition), Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- 中西正司・上野千鶴子，2003，『当事者主権』東京：岩波書店。
- 奥田道大，1996，「〈異質〉共存社会への回路——〈都市の世界・コミュニティ・エスニシティ〉調査覚え書き」広田康生編『講座外国人定住問題3 多文化主義と多文化教育』東京：明石書店。
- ，2004 a，「例えば都市社会学調査におけるモデルから異質認識へ」関西学院大学大学院社会学研究科 21世紀 COE シンポジウム〈人類の幸福と社会調査〉，東京・学士会館，2004年3月26日。
- ，2004 b，『都市コミュニティの磁場——越境するエスニシティと21世紀都市社会学』東京：東京大学出版会。
- 奥田道大編，1989，調査報告書『「もう一つの国際化」としての池袋——アジア系外国人の生活拠点化』立教大学社会学部奥田研究室。
- ，2001，調査報告書『アジアの新宿／池袋——現地面接調査記録コレクションズ・2000』中央大学文学部社会学科奥田研究室。
- ，2002，調査報告書『アジアの新宿／池袋——現地面接調査記録コレクションズ・2001』中央大学文学部社会学科奥田研究室。
- ，2003，調査報告書『アジアの新宿／池袋——現地面接調査記録コレクションズ・2002』中央大学文学部社会学科奥田研究室。
- ，2004，調査報告書『アジアの新宿／池袋——現地面接調査記録コレクションズ・2003』中央大学文学部社会学科奥田研究室。
- 奥田道大・有里典三編著，2002，『ホワイト〈ストリート・コーナー・ソサエティ〉を読む——都市エスノグラフィの新しい地平』西東京：ハーベスト社。
- 奥田道大・鈴木久美子責任編集，2001，『エスノポリス・新宿／池袋——来日10年目のアジア系外国人調査記録』東京：ハーベスト社。
- 奥田道大・田嶋淳子編著，1991，『池袋のアジア系外国人——社会学の実態報告』東京：めこん。
- ，1993，『新宿のアジア系外国人——社会学の実態報告』東京：めこん。
- 長田弘，1984，『一人称で語る権利』東京：平凡社。
- Portes, Alejandro, 1996, "Transnational Communities: Their Emergence and Significance in the Contemporary World System," Roberto Patricio Korzeniewicz & William C. Smith. eds., *Latin America and the World Economy*, Westport, Conn: Greenwood Press.

- Rumbaut, Rubén G. & Alejandro Portes, 2001 a, *Ethnicities : Children of Immigrants in America*, Berkeley : University of California Press.
- , 2001 b, *Legacies : The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley : University of California Press.
- Smith, Michael Peter, 2001, *Transnational Urbanism : Locating Globalization*, Oxford : Blackwell.
- Smith, Michael Peter & Luis Eduardo Guarnizo, eds., 1998, *Transnationalism from Below*, New Brunswick : Transaction Publishers.
- Soja, Edward W., 1996, *Thirdspace*, Oxford : Blackwell.
- Swanson, Bert E. & Edith Swanson, 1977, *Discovering the Community : Comparative Analysis of Social, Political, and Economic Change*, New York : Irvington Publishers, Inc.
- Taub, Richard P., D. Garth Taylor & Jan D. Dunham, 1984, *Paths of Neighborhood-Change : Race and Crime in Urban America*, Chicago : University of Chicago Press.
- 戸田貞三, 1933, 『社会調査』東京：時潮社。
- 上農正剛, 2003, 『たったひとりのクレオール——聴覚障害児教育における言語論と障害認識論』東京：ポット出版
- 渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編, 2003, 『都市の世界／コミュニティ／エスニシティ——ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』東京：明石書店。
- Whyte, William Foote, [1943] 1993, *Street Corner Society : The Social Structure of an Italian Slum*, Chicago : University of Chicago Press. (=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』東京：有斐閣.)
- Whyte, William Foote, with the Collaboration of Kathleen King Whyte, 1984, *Learning from the Field : A Guide from Experience*, London : Sage Publications.
- Wuthnow, Robert, 1998, *Loose Connections : Joining Together in America's Fragmented Communities*, Cambridge : Harvard University Press.
- 米林富男, 1960, 『社会学における人口誌学的研究方法について』私版。

New Perspectives on the Changing Japanese Urban Community : Discovering the “Sense of Coexistence” in Urban Research Acts

Michihiro Okuda*

■Abstract

Some have argued that Japan’s large-city society has a strong tendency to “accept sameness and reject difference” at the community level. I have corrected this erroneous argument through new community rules, but in 1988, I began the so-called Ikebukuro/Shinjuku study on the new theme of Asian newcomers, as “baby boomers,” coming to the inner-city areas of large cities. This study was conducted over the course of 15 years. These individuals, whose motive for coming to Japan was the need for creative strategies and design in their own lives, on the one hand play an intermediary role between the new arrivals, that is, the new newcomers who would arrive later, and the local Japanese, and on the other hand may also consider emigrating to countries other than Japan, including their native country.

The new reality in Ikebukuro/Shinjuku, in addition to identity problems encountered as newcomers’ children grow up, is that we can now see in it a mutual reference to the other large cities along the Pacific Rim that have welcomed Asian newcomers. The static comparative paradigm, given the racial homogeneity and state as they have existed thus far, is developing into a dynamic comparative paradigm which makes mutual reference to the way of life and sense of happiness of transnational peoples.

Key words : transnational asian newcomers in Japan, inner-city as a third space, feeling of urban coexistence, participatory action research, urban ethnography in the 21st century

*Emeritus Professor, Rikkyo University